

第1章 遺跡・史跡 ～ふるさとの歴史をたどる～

1 灯台笹遺跡案内板(灯台笹町)



昭和35年(1960)、当時中学生だった考古学好きの少年、田中勲さんが灯台笹町の畑で白い石のかけらを見つけました。それは石川県の歴史を塗りかえる大発見となりました。その石のかけらは、約2万2千年前に旧石器人が残した石器だったのです。この発見により、県内初となる旧石器時代遺跡の発掘調査が行なわれ、石川県の黎明期を解き明かすきっかけとなったのです。

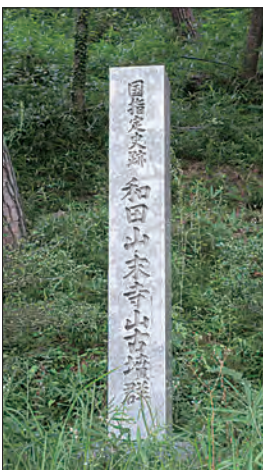
2 秋常山古墳群標柱(秋常町)

3 秋常山古墳群石碑(秋常町)

秋常山古墳群調査団(団長は濱岡賢太郎氏)による調査は、平成4年(1992)に秋常山2号墳から実施されました。発掘調査の結果、一辺約30m、高さ約5mを測る立派な方墳で、築造年代は5世紀半ばと判明し、能美古墳群では初例の円筒埴輪も発見されました。1号墳調査の結果、全長140mの前方後



円墳で、後円部径は約110m、高さ約20mであることが判明し、手取川から運ばれた円礫を用いた葺石が、墳丘斜面から発見されました。膨大な数の円礫を敷き詰めた1号墳は、大きさもさることながら主の威厳を象徴しているといえます。



4 和田山・末寺山古墳群石標(和田町)

和田山・末寺山周辺は寺井地域で早くから人々が居住したとみられています。現在、和田山に23基、末寺山に12基の古墳が確認されています。

中世の五輪塔は末寺山をはじめ、至る所にみられました。五輪塔とも知られず土囲いや土台に活用されてきました。古墳に埋葬された王、五輪塔に葬られた霊は、我々に直結しないかもしれませんが、この地に人々が住んだことの確かな証です。

5 荒屋古墳群案内板(松が岡) 平成17年設置

能美平野を望む標高47mの辰口丘陵上に所在しており、昭和62年(1987)の発掘調査で、A支群では径26mの8号墳を最大とする8基の円墳と6基の方墳、B支群では径10m前後の円墳が8基確認されました。A支群は史跡公園として現状保存されています。

A支群の円墳の周溝からは、須恵器・土師器が出土しており、その特徴から円墳群は5世紀後半から6世紀前半にかけて築造されたと考えられています。



6 加賀国能美郡家跡(中庄町)

弘仁14年(823)に加賀国が立国し、まもなく能美など4郡に分けられ、郡家が設置されました。周辺には倉庫・郡庁などが建てられたと考えられていますが、郡家跡を特定できる資料は見つかっていません。しかしながら、12世紀中頃からこの付近は郡家荘と称され、安楽寿院・勧修寺の荘園に変転しました。当時の郡家は中庄集落の北方の田圃辺りにありました。



7 瀧浪神社社標(長滝町) 昭和44年建立



瀧浪神社は、元慶2年(878)の瀧浪神正五位下を授与(『日本三代実録』)に始まり、延長5年(927)に加賀国能美郡八座に列し(『延喜式』)、7段にはしる瀑布を国家鎮護神として、神階を受けてきました。

明治22年(1889)に瀧浪社から瀧浪神社と改め、社殿整地の際に銅鏡などが出土しています。社碑は、寺井の書家久田鶴南氏の揮毫を得て建立されました。

8 県社狭野神社社標(佐野町)

9 狭野神社発祥地跡(泉台町)

延喜式内社で嘉祥3年(850)正六位上を賜わっています。加賀歴代藩主の崇敬篤く、特に利常公は自ら祭主となって祭儀を挙げています。明治5年(1872)郷社に列せられ、同32年(1889)県社に昇格しました。

狭野神社の発祥地は、古代には「狭野」と記された集落であり、「丘に囲まれた狭い野原」が由来のようです。古老の言い伝えを頼りに、泉台に碑石が建てられました。





10 式内熊田神社社標(吉原町)

延長5年(927)の『延喜式神名帳』に加賀国能美郡八座の一つとして記されています。『今昔物語』にも熊田神社の物語が伝えられています。

熊田村は手取川沿いにありましたが、寛永年間の手取川の氾濫により村は全て流され、吉原と合併しました。明治9年(1876)に吉原の八幡宮と、流された熊田神社との合祀が認められ、現在の熊田神社となりました。

11 建台寺跡(末信町) 平成元年建立

12 古屋敷跡(末信町) 平成元年建立

末信は初め、大長野との境の「ケンダイジ(建台寺)」付近にありました。建台寺は、のちに一向一揆の衰退によって失われたとされています。

嘉応3年(1171)に豪族長野氏によって開発され、のちに石清水八幡宮の社領となりました。その後、八丁川周辺の「フルヤシキ(古屋敷)」一帯へ移りますが、水難を避けるため現在地に移ったと伝わっています。



11



12



13 根上松古戦場(高坂・根上町)

根上松の初見は、源平合戦を書いた軍記物『源平盛衰記』です。寿永2年(1183)に加賀国侍井家二郎範方の17騎の軍勢が、根上松付近で平家軍と戦って敗れたとしています。

「…範方遂に討たれたり。根上と云う所は、東は沼、西は海、道狭くして分内なし」とあり、根上松辺りで激しい戦いが繰り広げられたことが分かります。

古代より中世にかけて北国街道が通じていた所でもあり、『義経記』には、源義経がこの道から奥州へ落ち延びたと記されています。

14 釈迦堂(来丸町)

集落の西方に中世の墓があり、言い伝えでは治承6年(1183)の倶利伽羅合戦で敗れた平家軍のうち、負傷した十数名が自刃したのを供養したものとされ、平家の武士の供養を隠すため「釈迦堂」と名付けたという話もあります。

江戸末期に、この墓を移したところ、夜な夜な武者の亡霊が現われるようになったため、元の所へ戻したとの話も残っています。



15 白山遥拝所跡(高坂・根上町) 令和元年建立

16 道林寺跡(道林町)

17 弁慶謝罪の像(道林町) 平成2年建立

18 弁慶謝罪の句碑(道林町)

19 源義経公通夜記念石碑(岩本町)

20 弁慶岩(岩本町)

根上松周辺は現在も白山の美しい姿を見ることができます。室町時代の書物で源義経の一代記である『義経記』には「根上松につき給ふ。是は白山権現に法施を手向くところなり」とあります。

また『源平盛衰記』によると、加賀の在地武士、井家二郎範方が平家と戦い討死した場所として記されており、中世にはこの地が白山遥拝所として、源平合戦の歴史を伝える景勝地として知られ、また社殿などは一切残っていないものの『加賀國式内等旧社記』(明治41年)に「根上松白山神社(中略)此地往昔白山神社遥拝之地也」と記されています。

歌舞伎「勧進帳」では、源義経一行が安宅の関所に差し掛かったところ、関守富樫が義経をいぶかしんだため、弁慶が主君義経を金剛杖で叩き、その疑いを晴らします。関を越えた後、謝罪する弁慶とそれを許す義経との主従関係が見せ場となっています。句碑には「主従のあつき涙の春しぐれ」の句が刻まれています。



15



16



17



『義経記』には、一行は根上松あたりに着き、そこは白山に手を合わせた景勝地として紹介され、その後、岩本の岩根宮を訪れ、本尊の十一面観音を参拝したと記されています。また弁慶岩は義経伝説のひとつで、一行が雨宿りをした場所と伝わっています。

21 塔の宮石塔・墓石群(岩本町)

岩根宮の奥の灯台笹境に殿宮という所があります。昭和36年(1961)の耕地整理の折に凝灰岩が20個余り発見されましたが、岩根宮の古宮跡と思われ、祟りを恐れて埋め戻したといわれています。この周辺のサギ谷・墓の谷・寺谷にかけて、中世の五輪塔と思われる遺物が多数発掘されています。



22 チョウヅカ観音像(湯屋町) 昭和63年建立

湯屋～徳山の旧道の上り口付近に墓らしいものがあり、地元の人たちは昔から、この辺りを「ちょうづか」と呼んでいました。

昭和56年(1981)の町道湯屋～徳山～和気線の建設の際、16基のうち10基が発掘調査され、人骨の入った納骨壺とともに、中国(北宋時代)の銅銭、青磁、中世陶器、土師器(はじき)などが出土しました。その後、これらの霊を慰めるためチョウヅカ遺跡公園が設けられ、米林勝二氏が制作された観音像が安置されました。

23 蘭塔跡(五間堂町・中庄町) 平成3年建立

卵塔(蘭塔)は僧侶の墓石の呼び名です。中世には一楽村があったといわれ、一楽寺が存在したとされます。北隣の田は「寺田」と呼ばれ、卵塔は古くから字名を僧侶の墓地である「らんとうば」と呼んでおり、一楽寺の墓地だったと考えられます。この卵塔場から明治初期に宝篋(ほうきょう)印塔(鎌倉末期に建立された供養塔)が発掘されました。



24 二口城址(西二口町) 昭和57年建立



慶長5年(1600)に前田利長が、小松城の丹羽長重、大聖寺城の山口宗永の攻略のため、三道山へ出陣しました。関ヶ原合戦の直前のことです。この時、利長は家臣山崎長徳に、二口で城を築くように命じています(『成田記』)。城というよりは砦に近い陣屋が築かれていたと考えられます。

25 宮の嶋旧跡(牛島町)

通称「宮の嶋」と呼ばれる牛島は、初めは現在の西南部に位置していました。しかし、一帯は低地による洪水被害が頻発し、村人は高台の現在地に移住しました。集落跡を村人は「めんしま(宮の嶋)」と呼称し、得橋神社が鎮座した地として石廟と石碑を建て、崇拝してきました。



26 一向一揆赤井堡址(赤井町) 平成15年建立

27 赤井稱名寺鬼瓦(赤井町) 平成4年建立

28 佐々木藤作顕彰碑(赤井町) 平成15年建立

赤井は近江源氏の佐々木氏一族がこの地に寺を開いたのが始まりといわれています。始祖の佐々木盛綱は、源頼朝が伊豆に流された頃からの家臣で、その挙兵に従い治承・寿永の乱で活躍しました。嫡男加治太郎信実も優れた武将で、承久の乱(承久3年〈1221〉、後鳥羽上皇が鎌倉幕府打倒のため起こした兵乱)に際し招集され、北陸道総大将として越中、越後に転戦、『吾妻鏡』は「関東の士、官軍を破るの最初也」と特筆しています。

赤井堡は一向一揆の拠点となっていました。天正3年(1575)8月、信長軍が南加賀に侵攻して赤井、福岡、福島、鍋谷などの堡も陥落したといわれています。「弘誓恩(ぐぜいおん)」は稱名寺29世釋真伍の書です。

稱名寺は、源氏の武将佐々木盛綱を開基とし、越前折立に御堂を開き、戦国時代の享禄の錯乱で越前から加賀に入ったと考えられます。その後、赤井の地に居を構えていましたが、幾度の洪水により寛永年間に小松へ移転しました。鬼瓦は平成3年(1991)に小松の稱名寺が本堂を修復した際に、古い鬼瓦を赤井の地に譲り受けたものです。

佐々木藤作氏は盛綱から26代とされ、文久3年(1863)に黒船渡来之衆取締方直支配を命じられ、安政から慶応年間には川筋普請方として指揮にあたりました。明治に入ると、加賀国第二十七区戸長に就任し、地券発行の基礎となる一筆調査を推し進め、「能美の赤井に佐々木在り」と謳われ、明治45年(1912)3月、天寿を全うしました。



26



27



28

29 大鷲山佛陀寺跡石柱(仏大寺町) 平成18年建立

今から約640年前、南北朝時代の貞治年間(1360年頃)に太源宗真が門前総持寺3世貫主、羽咋永光寺住持を経て、ここに寺を創建しました。太源が佛陀寺に在院したのは6年ほどでしたが、佛陀寺は太源派4,358ヶ寺の根本道場として、230年間君臨しました。

昭和から平成にかけて「郷土の歴史、文化」を見直すことが進められていましたが、その動きの中で、それまで「伝説の中での仏大寺」がこの地にあったことを、郷土史家・小中博、谷本慎吾の両氏が、太源宗真ゆかりの福井竜沢寺の住職や当時の区長・東出進一氏の協力のもと、その遺構もあわせて仏陀寺の跡を特定しました。現在、その正面口に当たる位置に記念の碑が建っています。



30 一里塚榎(えのき)(吉光町)

31 一里塚歌碑(吉光町)

慶長9年(1604)の江戸幕府による街道整備で1里(4km)ごとに設置されました。吉光の一里塚は、北陸道の粟生宿にあったもので、もとは南北に対をなしていましたが、明治14年(1881)の手取川洪水によって北側1基が流失し、南側1基が残ったものです。塚には榎が植えられています。北国街道両側にあった松並木と区別するためといわれています。県内では唯一の現存の一里塚です。

歌碑には一里塚からの眺めが詠まれています。



30



31



32 一里塚跡の石標(大成町) 昭和62年設置

正保4年(1647)作成の「加越能三箇國絵図」には、この地に一里塚の記載があり、北へ10mのところへ古松3本があったとされ、石碑側面に「右 小松へ一里六丁」「左 金澤へ七里」と刻まれています。この標柱はこの近くに一里塚があったことを示すために設置しました。



33 八丁川船着場跡(末信町) 平成元年建立

末信の船着場は八丁川の右岸にありました。水運は2艘の舟で安宅より肥料を運び込み、また産物、瓦などを小松方面へ輸送していました。藩の年貢米は長野と共に舟で小松城に納入しました。梯川の合流点から小松城まで8丁あることから八丁川といわれ、大正2年(1913)の寺井駅開設により舟は廃止されました。

34 里程元標(末信町) 平成元年建立

明治政府が道路整備にあたり、県庁から村々の距離を示す里程元標を明治6年(1873)に設置しました。寺井町ふるさと創生事業の一環として標柱が建てられました。



35 道路元標(寺井町) 大正8年建立

道路の起点・終点・経過地を表示するもので、大正8年(1919)の旧道路法により各町村に1個設置することとされました。寺井野村の道路元標は称仏寺への曲がり角に設置されています。

36 道路元標(東任田町) 大正8年建立

加賀藩の参勤交代の往還道として整備された北国街道は、明治になって国道に指定され、大正8年(1919)に道路元標が設置されました。東任田には吉田村の道路元標が置かれ、手取川に至る国道は昭和10年(1935)までは、寺井から東任田を経て栗生となっていました。



37 釜屋の石敷(山口町・中町・大浜町)

海岸部の民家では、砂地の地面が雨で流れて、建物の柱を支える基礎が動かないよう、家の土台の周囲に石を敷き詰めました。この敷石は砂埃を防ぐ効果があるとして、玄関や家回りに徐々に広がっていきました。暮らしの工夫が残る貴重な痕跡です。中町、大浜町など釜屋筋に活かされて現存しています。右の写真は中町の民家の石敷です。



38 一本松跡碑(下開発町) 昭和12年建立

古くから「下開発の境松」と呼ばれ、巨樹・老樹として辰口町史の巻頭グラビアにも掲載されていましたが、平成8年(1996)に枯れたため伐採されました。この松には天狗が住んでいたという言い伝えがあります。今は切断された根株と以前の石柱が残されています。

